

ナラティブの可視化とアーカイブ

滑田明暢

(立命館大学大学院)

1. はじめに

本企画シンポジウムでは、タイトルに「ナラティブを媒介とした学際的研究」とあるように、福祉、法、医療の領域からナラティブを用いた研究が報告されていた。それぞれの領域におけるナラティブを用いた研究の応用可能性が示された一方、他方では、ナラティブの豊かさに実践的研究がどう向き合えばよいのかについて示唆を与えるものであったといえる。本コメンタリでは、シンポジウムで議論された内容も含めてナラティブの特徴を整理し、ナラティブからどのように成果を得るのかを検討しながら、得られた成果をどのように蓄積していくのかについて議論を進めていきたい。

2. 実践的研究とナラティブ

本企画シンポジウムで報告された研究は、仮説を検証し、理論が正しかったかどうかを検討するよりも、現場の課題解決に役立つ知識を生産し、得られた知識を現場に還元していくような実践的志向をもった研究として捉えられる。例えば、廣瀬氏の研究では「ひきこもりに関わる支援者の支援をするために家族のシステムを理解すること」、山田氏の研究では「裁判員裁判を含めて裁判において冤罪を防ぐために供述調書を理解すること」、福田氏の研究では「全人的な医療に向けて病いとともにある人々の生活（ライフ）を当事者の視点から理解すること」といったように、現場からの要請に応える形でそれぞれの研究の目的は形成されている。そのため、自ずと現場の実情や声をくみ取りながら知識を共同構築していく姿勢をもつことになり、その協力者となる人々の立ち位置やこれまでの経験を詳細に反映するナラティブを研究の資料やデータとして扱うことにつながっている。

ではナラティブとは何か。ナラティブが何であり、どのような性質をもった

ものなのかを定義することは、ナラティブを扱う研究においては不可避であるといえるが、本企画シンポジウムの議論においてキーワードとなっていた個性と複雑性と時間性は、研究におけるナラティブの特徴をうまく言い当てた表現といえるであろう。ナラティブを「語られたもの」や「語る行為そのもの」と捉えるのであれば（やまだ，2007），研究の資料やデータとして扱われるナラティブにおいては，語っている人や語られている場面，語られている時も重要となってくる。言い換えれば，個別性が尊重され，いつどこで誰が語ったかが限定されるということになる。そうした場所と時間と主体が限定された個別具体的語りとしてのナラティブは，語られている時空間の文脈のなかに位置づけられる一方で，語り手の歴史的経験を含みこむこともできる。さらに，その語り手としての個人は語る場面を人生のなかで複数回もつことができるため，語るごとに語る内容や語り方にゆらぎができる。また，語られていることのなかで流れている時間と語りが行われているときに流れている時間といったように，ナラティブは多層的な時間情報をもっており，その複雑性はさらに増していく。まとめると，個別でありながらも複雑で多層的な事象を含んでいるという特徴が，ナラティブに豊かさをもたらしているともいえる。

3. ナラティブを用いた可視化

こうした豊かさとも複雑さともいえる特徴をもったナラティブを研究の資料やデータおよび分析対象とする場合，どのように整理することができるのか，どのように解釈することができるのかといった問題に出くわすことが考えられる。本企画シンポジウムで報告された研究は，上記の複雑性の解明ともいえる問題を，それぞれ分析ツールあるいは分析の枠組みを用いながら解決を図っていた。例えば，廣瀬氏の研究では複線径路等至性モデルを用いて研究協力者における意味づけの変容と相互作用の変容過程を記述し，山田氏の研究ではKTH CUBE システムを用いて調書における供述が日を追って被告人ストーリーから検察ストーリーへと変遷していく過程を示し，福田氏の研究ではSEIQOL-DW を用いて難病ケアにおける患者の QOL 評価の変容を描いていた。

一方で，ここで強調しておきたいことは，ただ単に分析ツールや枠組みを用いていたことが各報告にみられる共通点であるというのではなく，いずれの研究もその複雑な情報のなかからある枠組みでもって事象を切り取り，意味の

ある形で顕在的にその事象の変容過程を描いているという点を指摘しておきたい。家族システムの変容も、供述内容の変容も、QOL 評価の変容も、当事者の語りを聞くことなしには気付くことができなかつたものであり、あるいは気付かれてはいても明確な形で表現がされていなかつたものである。言い換えれば、研究の実践を通して、具体化されていなかつたものがその他の現場にいる人や現場にいない人にも伝わるような形で意味のある情報として再形成されているといえる。現場にとって意味のある情報を顕在化させて伝えることができるという点では、上記の分析ツールあるいは枠組みを用いた研究実践は、現場における研究の意義と可能性を示しているといえる。

4. ナラティブを用いた実践的研究とアーカイブ

実践的研究が目指すものの1つは、関連する人々に役立つ研究知見の蓄積である。研究知見の蓄積を考えたとき、どのように情報を蓄積するのも一考する必要があるという点ではアーカイブの考えとつながる。アーカイブの趣旨の1つは、ありとあらゆる情報を蓄積し、多種多様な情報を記録し保持することが趣旨であるといえる一方、他方では、蓄積された情報を実際にどのように役立てていくかを考えていく側面もアーカイブは併せもつ (Thomassen, 2001)。蓄積された情報を実際に役立てるためには、必要な情報が検索可能であり、検索されたものも意味が伝わるような形で保存されている必要がある。

ナラティブの複雑さを紐解き、豊かなナラティブから意味のある情報を取り出して知見を得るという点で、本企画シンポジウムで紹介された研究は示唆を与えてくれる。上記の複線径路等至性モデル、KTH CUBE システム、SEIQOL-DW のような枠組みを用いることで、意味のある抽象的な情報を生み出す手法の可能性を示してくれているといえる。一方、その抽象化の時点で抜けおちていく情報も存在する。本企画シンポジウムで議論されていたような、ナラティブが生成される現場の状況や対話性、あるいはナラティブに入り込む関係性である。取り出された情報は、ある意味でナラティブが生み出されたときのリアリティを欠いた情報になる。豊かな情報から何を取りだし、どのように蓄積していくのか。今後、実践的な研究が進められていくなかで議論されていく課題となるだろう。

【引用文献】

- Thomassen, T. (2001). A first introduction to archival science. *Archival Science*, 1, 373-385. (石原一則 (訳) (2005). *アーカイブズ研究*, 2, 4-16)
- やまだようこ (編). (2007). *質的心理学の方法—語りをきく—*. 新曜社.